

東京・入谷遺跡

- 1 所在地 東京都台東区下谷二丁目
- 2 調査期間 一九九九年(平11)一〇月
- 3 発掘機関 台東区文化財調査会
- 4 調査担当者 小俣 悟
- 5 遺跡の種類 寺院跡・町屋跡
- 6 遺跡の年代 江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(東京東北部)

入谷遺跡は台東区の北寄り、武蔵野台地東端の上野台の東方に位置し、東京低地西側に立地する。本調査は、共同住宅建築に伴う

調査である。

遺跡周辺は、近世以前には千束池などに面した湿地であり、江戸時代に整地して寺院・町屋が成立したものとされる。調査地は、南側が寺院(良感寺)で北側が町屋(入谷町)であった。なお良感寺は一九一四

年(大正三)に他所へ移転している。

検出遺構は、井戸・竹樋・桶基礎・土坑・道路などであり、廃棄年代からⅠ期(一八世紀前半)・Ⅱ期(一八世紀後半)・Ⅲ期(一九世紀中葉)・Ⅳ期(近代)に区分される。道路は一九世紀後半頃のもので、その時期の寺院と町屋の境となる。出土遺物は大量の木製品、中国・ヨーロッパ・琉球製などの陶磁器、入谷(坂本)産と推定される土器などである。木簡は、(1)は近世包含層より、それ以外は土坑(二一・四六・五〇号遺構)より出土した。廃棄年代は、四六号遺構がⅠ期、二三号遺構がⅡ期、五〇号遺構がⅢ期である。五〇号遺構は良感寺境内、他は町屋に位置すると推定される。

8 木簡の釈文・内容

近世包含層

- (1) ・「辰」(焼印) 宝
□□□太「宝」(焼印)

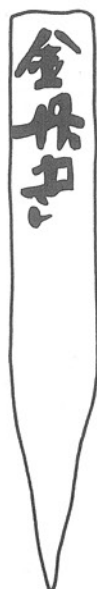
・「九枚」(焼印) 宝
□「宝」(焼印)

五〇号遺構

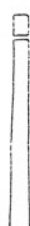
- (2) ・「金七十」
・「金廿」

60×50×5 065

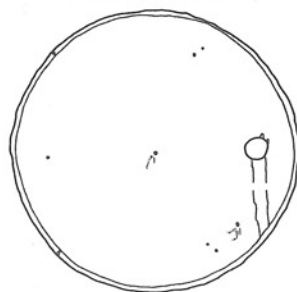
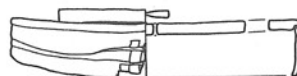
150×24×4 051



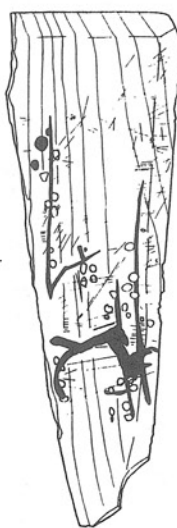
(2)



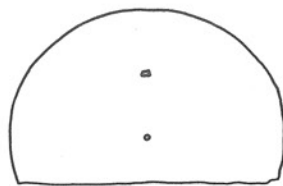
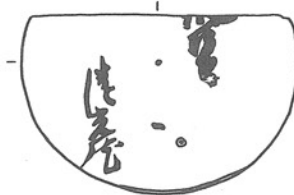
(1)



(3)



(参考 羽子板)



(4)

二二号遺構

(3) 「天明

八歳

日□
三月

伊藤」

径150×高さ36×腰高3 061

四六号遺構

(4) [納カ]
□豆

清光院」

径140×高4 061

(1)は、方形で四隅が切られている。上側中央に小穴があり札状であるが、用途は不明である。表に「辰」裏に「九枚」と大ぶりの文字を書き、それぞれの左に小さな文字が墨書されている。更に各墨書の下には焼印が押される。「□□□太」は人名とも思われる。本例と類似したものは不明であるが、表面に植物名や季節名などを、裏面に数字を記している札状の木簡には「關茶札」や「聞香札」の例がある（斎藤進「東京・汐留遺跡」本誌第二二号）。

(2)は、下部を尖らせた付札状の木簡である。値段を記したものであるうか。(3)(4)は円盤状で、桶蓋と推定される。(3)は、「返り」と十字状の摘みを有し、栓の穴を持つ。天明八年（一七八八）の年月

と「伊藤」名の墨書から、贈答用とも思われる。(4)はやや小ぶり得上半が欠けている。「清光院」は寺院名と推定され、近在では浅草（台東区、真言宗）と小日向（文京区、臨済宗）にみられる。おそらく寺院名産品の容器と思われ、商品名は納豆と推測される。

また文字ではないが、羽子板と思われる木製品に絵を描いたものが出土している。長さ（二七〇）mm幅（九〇）mm厚さ六mm、下部と右側面を欠損する。片面に人物・魚・花吹雪を、片面に梅樹を描く。大半は墨であるが、部分的に朱・金彩が見られる。人物は踊っているようである。その他、漆器碗に朱書で「本」、柄杓に金彩で「瓢」、桶板に焼印で長方形枠に「大和屋」「改撰」、包丁柄に焼印で横長方形枠・丸枠に「キ」とあるものなどが出土している。

なお釈読にあたっては坪井利剛・平野恵氏などのご教示を得た。

（小俣 悟）